



聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。見せしめのため、他の殉教者とともに左耳をそがれた。



発行日：2013年7月31日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣
イエズス会聖三木図書館

〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/

初のイエズス会員の教皇



ニコラス・イエズス会総長と歓談する新教皇

第266代教皇として3月に就任されたフランシスコ教皇(76)は、アルゼンチン・ブエノスアイレス大司教(ベルゴリオ枢機卿)から選出された初の米州大陸出身者で、また同時にイエズス会出身の初の教皇でもある。
両親は北イタリア出身の移民で、神学校時代から一貫して貧困問題に力を注いでこられた庶民派。就任後も、気さくにイエズス会系学校の子供たちと交流されたり、米国製大型バイクの愛好者グループにローマのサンピエトロ広場で祝福を与えたりされた。教皇は世界の約12億人のカトリック教徒の頂点に立つ最高位聖職者。貧困撲滅や弱者救済の必要性に加えて、宗教間の対話の深化・発展などカトリック教会の抱える多くの問題にも積極的に指針を示されることが期待されている。
教皇庁関係通信社の幹部によると、イエズス会創設者の一人、聖フランシスコ・ザビエルが初めて日本にキリスト教をもたらし、その故事に習い「フランシスコ教皇は、宣教師として日本に行きたかった」という個人的な思いと、ヨハネ・パウロ2世がかつて『3000年(2001~3000年)の務めは、アジア』と発言されたことに強い関心があるという。
フランシスコ教皇は、この夏ブラジルを訪問されるが、来年の訪問国候補に日本と韓国が浮上している。新教皇の日本訪問が待ち望まれる。



聖路加国際病院理事長 日野原 重明

人生を豊かに生きるには

—私の百一歳の人生から学んだこと—

私たちの人生の中には、身辺上のことや、日本の国内外の経済的不況や政治的問題が山ほど積み重なり、平穏な気持ちで生活することがなかなか困難な事情にあります。

しかし、自分の生き方次第で、人生を少しでも豊かに生きようとする努力があれば、それが可能であることを申し上げたいと思います。

長い人生から何を学んできたか
私は二〇一二年十月四日で満百一歳になりました。その長い一世紀を超える期間に、世の中は大変変わりました。いくつもの戦争がありましたし、地震や津波があつたり、日本と韓国、中国、ロシアなどという近隣国家の間に、次々と解決困難な事件が連続的に起こってきました。

しかし、そのような国家や社会状況の中で、私たちは自分をコントロールすることができるとは、長期の療養

をし、また五八歳の時には日本赤軍九名の企んだハイジャックに遭遇し、百名の乗客はダイナマイトを持った犯人に威嚇されたこともありました。

そのような中で、私はどんな状況の中でも自分の心を平静、不動にすべきことを学ぶことができたと感じています。

豊かに生きるといふことは、
さて、みなさんの心はあなた方自身をマインドコントロールできるということをしつかり考えてみてください。そして、豊かに生きるとはどんな生き方なのか、朝のひと時、あるときは夜のひと時を、座禅のような体位をとって目を軽く閉じて考えてみてください。

著名な精神分析学者エーリッヒ・フロム(一九〇〇—八〇)の有名な言葉を紹介します。
「たくさん持つ人が幸福ではなく、たくさん与える人こそが幸福である」。この意味は、お金や財産を寄付すること

とはなく、あなたの他人への思いやりを示すこと、周囲の誰かのためにあなたは何ができるかを考えてみてください。あなたが他の人に与えるというその内容はそれぞれ違うでしょうが、あなたが持っているものの中で、何を与えるかというのを深く内省してください。

忙しい毎日の生活の中では、みなさんは自分の仕事や、子どもたちのこと、親の面倒をみたりすること、相当忙しい時間を過ごしていることと思います。しかし、その毎日の生活の中に、上に述べた思いを持つことで、人間としての心の平安を持つことができるのです。

微笑みは何にも勝るプレゼント
心を明るくすること、いつも笑顔をもつこと、そのような思いを持つことが心を明るく豊かに生きることです。人と接するとき、いつもおのずと笑顔が生まれる、あの人には笑顔の美しい人だと友人からいわれるような自分の姿を創りあげることです。

その笑顔が世の中を変えていく、世の中に明るさをもたらすというのを覚えてください。つらいことが続いている人でも、その微笑みをもつ人と話しているうちに心の安らぎを得ることができま

す。そのような友人関係を築くように努力してほしいのです。
私は多くの重症患者さんを診察してきました。今でもホスピスに入院している死の迫つた患者さんをお見舞いしています。そのような病いの中にある人であっても、私を美しい笑顔で迎えてくださることが少なくありません。
互いに交わす微笑みの中から、希望が生まれてくるのです。

【日野原 重明氏】一九一一年山口県生まれ。一九三七年京都帝大医学部卒業。一九四一年聖路加国際病院の内科医となり、内科医長、院長等を歴任。二〇〇〇年に「新老人の会」を結成し、会長に。二〇〇五年文化勲章受賞。日本に米国医学を導入した第一人者。



新法王

イエズス会流の新風を吹かす

杏林大学客員教授・文明論考家 上野 景文

史上初の中南米出身者、史上初のイエズス会士として、三月に就任した第二十六代ローマ法王フランシスコは、僅か三か月の間に、バチカン、カトリック世界に多くの新風を吹き込み、広く世界全体の耳目を集めている。以下本稿では、イエズス会との関連を中心に、新法王就任の意味を考え、今後を展望する。

「前線文化」を体現

先ず、イエズス会士が選ばれたことの意味は何か。言うまでもなく、イエズス会士としてのベルゴリオ枢機卿は、ブエノスアイレスにあって、清貧、謙虚、献身を旨とする修道士特有の「前線文化」を一身に体現した人物で、王朝風のバチカン「中樞文化」とは対極に位置する。新法王は、バチカンに移ってから、質素、謙遜の姿勢を愚直なまでに貫いている。すなわち、就任行事を簡素化し、法王指輪や装束を質素化し、宮殿ではなく一般宿舎で生活し、法王離宮は使わないとするなど、王朝風文化に風穴を開けつつある。このような新法王の行動は、大衆への直接的語りかけを好む気さくな人柄とも相俟って、カトリック世界内外で共感を呼んでいる。とは言え、この新風が、バチカンの体質を変容させるところまでゆくか、なお定かではなく、今後を見守る必要がある。

貧しさに寄り添う

同時に、イエズス会士ベルゴリオは、貧しい人たちに寄り添う姿勢を貫いて来たことでも知られるが、法王就任後もその姿勢を堅持している。すなわち、五月には、「拝金のカルト」を放逐すること、で貧しい人々を助けよと各国指導者に訴え、次いで六月の「世界環境の日」には、飽食は貧しい人々から（食べ物を）「盗む」に等しいとして、使い捨てや無

駄の文化を厳しく批判した。二十〜三十年前ベルゴリオ司教（当時）がアルゼンチンから日本に派遣した神父のひとり、神学校時代に同司教から、「学校で祈っているだけでは駄目だ。一週間のうち一、二日は、貧しい人たちの多い地域に飛び込んで、かれらと同じ目線に立って交わりなさい」と説かれた旨語っている。当時から教会の社会的役割にもこだわる筋金入りだった訳だ。

更に、新法王は五月二十二日、「カトリック教徒であるか、ないかに関わらず、神の救いは至るべき人を対象とする」、「（その対象には）無神論者すら含まれる」と語って注目された。この点は、マルコによる福音書でつとに説かれ、半世紀前の第二バチカン公会議で確認されたことから、一般論的に言えば目新しくはない。「壁の文化」を越えて

だが、新法王の発言は何処か新味を感じさせる。その日、法王は「人々の間に壁を建てるな」とも語ったが、ズバリ法王の思想の核心を突いたものだった。すなわち、これまでバチカン幹部からは、たとえれば、「カトリックだけは特別だ。あとの宗派・宗教は二流だ」との前提に立った「壁の文化（exclusionism）」の発言が聞かれたが、新法王はそこが違う。この法王は、「宗教の壁を越えて、全ての人を取り込もう」という「壁なし文化（inclusionism）」の人なのだ。この法王のinclusionismのルーツ、イエズス会にあると見て良いのだろうか。

さて、五十年前第二バチカン公会議を経てオープンになったバチカンであるが、この二十〜三十年再保守化が進行し、閉鎖的になったものの如く。Inclusionismが後退し、exclusionismが強まったと言うことだ。それだけに、今

回inclusionism志向の法王が頂点に立った意味は少なくない。バチカンを再び開かれたものにするために第三公会議をこの声が聞かれる中、新法王の今後の舵取りから目が離せない（六月十六日記）

【参考】新法王は、他に、一連のスキヤンダルにどう対処し、バチカンをどう建直すか、或いは、欧州中心主義の強いバチカンをどう変えてゆくか、と言った懸案とも取り組まねばならない。その関連では、二つの拙論――「転換点を告げる『バチカンの新風』」（五／十六付毎日新聞）、「新ローマ法王フランシスコの船出」（五／九、左記霞関会HP）を参照願いたい。

<http://www.kasuminigasekikai.or.jp/cn3/jijico/turn.html>

【上野 景文氏】一九四八年東京生まれ。東京大学卒。七〇年外務省へ。駐グアテマラ大使、駐バチカン大使などを経て二〇一一年より現職、文明論考家。著書に『バチカンの聖と俗 日本大使の一四〇〇日』（かまくら春秋社）、「現代日本文明論 神を呑み込んだカミガミの物語（第一企画）など。

新教皇誕生を

体験した巡礼行

菊地 祐子

今回で四回目となる、母校上智大学の創立百周年ツアーに参加した。上智大学は、カトリック修道会のイエズス会により一九一三年設立された大学で、過去三回の旅では百周年を迎えるにあたり、そのルーツを辿りながら創設を感謝するのが目的だった。そこでイタリア・フランスク・ドイッ・スペインなどヨーロッパのイエズス会所縁の地を訪れてきた。今回は上智の創設を指示してくださった教皇への返礼を主な目的としてこの三月、再びイタリアを訪れた。旅を通して上智大学がカトリックの精神に深く根ざしていることを感じ、同時

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本 2013年6月

- | | | |
|-----------------|---------------|------------|
| 哲学者キリスト | フレデリック・ルノワール著 | トランスビュー |
| ヘンリー・ナウエン | マイケル・オラフリン著 | 聖公会出版 |
| 根本問題をつかめ！ | 来住英俊著 | ドン・ボスコ社 |
| この世に恋して | ジャンヌ・ボッセ著 | メディアファクトリー |
| 憩いの水のほとりに | 曾野綾子著 | ワック |
| 夜回り先生いじめを断つ | 高橋重幸著 | オリエンツ宗教研究所 |
| イエスに会った女性たち | 水谷修著 | 日本評論社 |
| シモーヌ・ヴェイユのキリスト教 | 英隆一朗著 | 女子パウロ会 |
| どうきん | 松原詩乃著 | 教友社 |
| 新カトリック教会小史 | 河野進著 | 幻冬舎 |
| 人はみな、けなげに生きている | N. タナー著 | 教文館 |
| ことばのともしび | 森一弘著 | サンパウロ |
| ゆるしへの道 | 末盛千枝子著 | 新教出版社 |
| フランクルとの（対話） | イマキュレー・イリバギザ著 | 女子パウロ会 |
| 新島八重愛と闘いの生涯 | 山田邦男著 | 春秋社 |
| | 吉海直人著 | 角川学芸出版 |

に信仰や信念が人に与える力の大きさに心を動かされた。また百周年に至るまでの道程は決して平坦なものではなく、海外のカトリック教区からの寄付にも支えられてきたことを知り、不自由のない学生生活を過ごせたことに感謝の念を新たにしました。

旅はミラノ、フィレンツェから始まり前半は比較的観光の要素が強かったが、今回特に印象的だったのは、その次に訪れた聖フランチェスコの地アッシジであった。中高生時代に毎週一回朝礼で唱えていた「聖フランチェスコの平和の祈り」は、当時の私にとつて余りにも高潔な内容で別世界の如く思っていたが、今回アッシジを訪れることで改めてその内容を思い起こした。その聖フランチェスコが活動の拠点としたサンタ・マリア・デリー・アンジェリー教会内のポルツィウ・ンコラ礼拝堂で、東日本大震災から丸二

年となる三月十一日、全員で復興の祈りを捧げることが出来たのは嬉しいことだった。

その後、いよいよ最大の目的地であったローマ・バチカンを訪れた。予定していた教皇への謁見は、前教皇の生前退位でかなわなかったが、全く思いもかけなかったコンクラーベを経て新教皇が誕生する瞬間の興奮を体感できた。イエズス会から初の教皇が選出された翌日には、イエズス会の本部聖堂のジエズ教会で、かつて上智大学で教鞭を取られていたニコラス総長司式で捧げられたミサに与られた。(写真) またローマでは、ツ



アーの全参加者と現地ソフィア会員との夕食会が催された。今回の旅で、かつては他人事のように感じていた「平和の祈り」、そして上智大学の教育精神を自身のこととして実践することに、人間としてあるべき姿の一つの形を見出せたように思う。旅の間に思い巡らせたことを心に留め、日々の行動に反映させ積み重ねることで、人間として成長していきたい。教皇フランシスコの誕生と云うビッグな体験と合わせ、私に非常に多くのことを与えてくれた旅だった。(一九九九年上智大学理工学部卒業)

『被爆マリア』のイタリヤ平和巡礼

サルデーニヤ島くバチカン

「被爆マリア」の平和巡礼 代表 枝川 葉子

ことの発端

上智大学元学長、ヨゼフ・ピタウ先生を囲んで毎月開催されている「ピタウ先生が語る会」の二〇一〇年十二月の月例会で「被爆マリア」がテーマとして取り上げられ、「災害から文化財を守る会」第八号に掲載された「被爆マリア」の記事を資料として配布しました。「被爆マリア」とは一九四五年、長崎の原爆で爆心地から五百メートルの旧浦上天主堂の祭壇で被爆した木彫りのマリア像で、焼け跡のガレキの中から奇跡的に頭部(約三十センチ)が発見されました。(写真) その後参加者の澤滋夫氏が記事を英訳し、「被爆マリアの証言」(城麗子編著



澤滋夫氏、アドスリー)として出版されました。その本を翌年四月にピタウ先生の弟のアンジェロ・ピタウ神父に贈ったところ、故郷サルデーニヤで毎年末に開催される平和行進にぜひ「被爆マリア」を参加させてほしいとの依頼がありました。八月にアレス・テッラルバ教区デッ

【注】『法王』と『教皇』は新聞などで『ローマ法王』との表記もありますが、日本のカトリック中央協議会は、一九八一年のヨハネパウロ二世の来日を機に『ローマ教皇』と表記を統一しました。

トリ司教より正式な依頼文書が届き、八月末に長崎の高見大司教から許可をいただくことができたのです。圧倒されるほどの大歓迎

二〇一二年の降誕祭を過ぎた十二月二十七日に、長崎浦上教会の小島栄主任司祭と「ピタウ先生が語る会」のメンバー六名が、サルデーニヤで開催される平和行進に参加するため成田を出発いたしました。翌二十八日は、州都カリアリのボナリアの聖母教会での歓迎式典とミサがあり、地元信者が埋め尽くされた聖堂を小島神父が「被爆マリア」を高く掲げて入場すると全員の眼差しがマドンナへ向けられ、圧倒されるほどの熱い思いに大変感動いたしました。

二〇一二年十二月二十九日の第二六回平和行進は、サン・ガヴィーノ・モンレアルレでの開催でした。サンタ・キアラ教会で平和ミサがあり、午後三時から平和行進、そして五時半から広場で「平和アピール」が行われました。壇上には「被爆マリア」が安置され、サルデーニヤの司教、市長に続き、アンジェロ・ピタウ神父の力強いスピーチがありました。そして、小島神父が高見大司教から託ったメッセージをイタリア語で語り始めると、広場の五千人ほどの群集は静まりかえり、熱心に聞き入ったのです。

教皇謁見の榮譽

一月二日、水曜日恒例の一般謁見に拝謁いたしました。パウロ六世ホールに「被爆マリア」を携えて入場すると最前列に誘導され、壇上で「被爆マリア」を中心に教皇ベネディクト十六世にご挨拶いたしました。サルデーニヤ出身の大司教のお手配で実現したのですが、まさに「被爆マリア」のお導きがあったからだと思っております。

聖三木図書館から

【お知らせ】

- ◎夏休みの長期貸出について
八月二十二日(木)～三十一日(土)までの夏期休館に伴い、八月二日(金)から長期貸出を始めます。休館中の返却は入口の返却ポストへ。
- ◎聖イグナチオ教会図書館は誰でも利用できます。登録・利用については図書室の規定に従って下さい。
- ◎場所 信徒会館二階
- ◎開館時間 日曜日午前九時半～十三時

【友の会からのお願い】

- ◎聖三木図書館友の会への新入会および会員継続更新をお願いします。
- ◎年会費 一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円
- ◎入会手続き 氏名・年齢・住所・学生証明書などの確認書類を図書館受付にご提示ください。
- ◎年会費は、銀行口座(ゆうちょ)口座からの自動払込みをご利用いただけます。
- ◎年会費お振込先
みずほ銀行四谷支店 普通預金
口座番号 二二5848
- ◎口座名義 イエズスカイセイミキ トシヨカントモノカイ

*お名前の後に会員番号をお書きください。



開架式図書館を裏で支える

聖三木図書館は、約三万冊の蔵書を利用者が直接手にとつて見られる「開架式」になっています。この公開されている図書ほかに、当館階下の書庫には複本や寄贈された本、古い雑誌やカトリック新聞のストック、洋書などが約一万冊あります。これらの裏舞台の資料の整理と管理も職員の大変な仕事です。



【特別寄稿】

遠いアフリカ近付ける 『平和の籠』
ルワンダ取材して思う

道傳 愛子

「成長大陸」の光と影

この六月、横浜でTICAADアフリカ開発会議が開かれた。世界銀行、国連開発計画などと共催で五年ごとに、日本で開催される会議は、今年で五回目になる。今年のテーマは「躍動のアフリカと手を携えて」。確かにアフリカは、今や投資額が支援額を上回り、「成長大陸」として世界の注目を集めている。

しかし天然資源に恵まれ経済成長にはずみがつく国がある一方で、エネルギー資源に依存しない自立した経済への転換が課題の国がある。長く続く紛争、災害などで、サハラ砂漠以南の全人口の半分は一日一ドル未満で生活しているのもまたアフリカの現実である。五十四の国からなるアフリカは日本からは遠く離れ、一つの像を結ぶのは難しい。

二〇〇八年、アフリカのルワンダ取材した。ルワンダは「千の丘の国」と言われる。緑のなだらかな丘陵が地平線の彼方まで連なる様子は文字通り「千の丘の国」。朝もやにアフリカの強い光線が射しこみ、美しい。そのルワンダで、一九九四年四月、それまで隣人として共存してきたフツ族とツチ族の対立でおよそ百日間に百万とも言われるツチ族が虐殺された。多くはナタや斧で斬殺され、助かることを祈って逃げた教会や学校でも殺戮が行われた。そうした現場は虐殺から十五年近く経過しているにもかかわらず、壁には血痕が残り、薬剤のにおいからしきものが立ち込め、気配は何年経っても消えることがないように思われた。虐殺の被害者を支援し、ビジネスを通してルワンダの国づくりを行う取り組みとして始まった首都キガリのバラ園では、



JR青梅線の西立川駅前に広がる緑豊かな公園は「国営昭和記念公園」です。西立川口から入場して水鳥の池の辺、水遊び広場をすぎて「もみじ橋」を渡った所の斜面に、淡青色のネモフィラが咲いていました。1983年に開園されて全体で165ヘクタールもある同公園ではほんの一部ですが、花言葉「ゆるし」と云うネモフィラにふさわしい淡青色で一面を覆っていました。都心から近く、ネモフィラの瑠璃色に浸れるところです。

朝早くから女性たちがバラの手入れをするほどにビジネスとして成長したという。かがんで熱心に苗の手入れをする女性にインタビュースしようと思つくと、腕には骨まで届くほどのえぐられたような傷があった。自分は折り返した死体の一番下で気を失っていたために、すでに息絶えたと思われ、それ以上の危害を加えられず、ひとりだけ助かったのだということ。その時の虐殺で家族はすべて失ったこと、今はこうして仕事があり、将来のことを少しづつ考えられるようになったことを静かに話してくれた。

ルワンダでは、もともと隣人として共存していた虐殺の被害者と加害者、その親族が今も同じ共同体に生活していることが多い。バラ園同様、国連やNGO、ルワンダ政府も共同で和解の取り組みを行っていた。その「Peace Basket

『平和の籠』を編むプロジェクトがあった。ルワンダでとれるサイザル麻などを使って、生活の中で使われるふたものの籠や、ボールのような平たい籠を器用に編み上げて行く。青と白、オレンジと黒など原色を使って大胆に編まれた幾何学模様は鮮やかで活力にあふれている。

編み手の女性たちは十人ほど、作業部屋の外の土間に座り、おしゃべりをしながらも手を休めることなく編み上げて行く。籠を編むことは生計のためだけではなく、材料費を融通しあったり、模様の編み方を教えたり教つたりする中で、否応なしに会話し、お互いの力を借りて作業することによって和解のきっかけとなるのだという。こうして未来を照らす小さなあかりが灯っていくのだろう。

ルワンダに光明

ルワンダの『平和の籠』は今では日本の女性起業家ルイズ・ビィ (<http://www.ruseib.jp/home.html>) という会社でJETROの支援を受け、ルワンダの女性たちと協力して商品開発し日本にも輸入されている。女性たちが編み上げた籠は、遠くルワンダから運ばれ、日本各地のデパートなど九十店舗で販売もされている。

発展には、道路や学校などのインフラが整備され、経済成長が軌道に乗り目に見えるところで前向きな変化がある、と言う意味と、国民が元気を取り戻して生活をしていく、という二つの意味があるように思う。遠く離れたアフリカと手を携えることは簡単ではない。『平和の籠』は、日本でそれを手にすることは、遠く離れたアフリカと手を携えることにつながることを教えてくれている。

【道傳 愛子氏】NHK解説委員。東京都出身。上智大学外国語学部英語学科卒業。一九九四年〜九六年コロンビア大学大学院留学。二〇〇〇年から二年間タイ・バンコク特派員。「ニュース9」「海外ネットワーク」など担当後〇七年解説委員。NHKワールド・BS1放送「アジア・ボイス」キャスター。

キリスト教 関連書籍 出版・販売
聖像・聖品 販売

カトリック世界の多彩な情報満載!
月刊 **カトリック生活**
1冊 210円 年間 3,500円 (送料別)

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-9-7
TEL 03-3351-7041 FAX 03-3351-5430

いつでもよいものを—— ネットショップ **ドン・ボスコ社** www.donboscosha.com

インタビューア・森一弘司教により引き出される、人生の重みの数々。光と希望の書、待望の書籍化!

娘の自死
いじめ・不登校
母親の死の責任
修道生活の負担
セクハラ被害
夫の裏切り
介護ストレス
がんの告知
etc...

人はみな、
けなげに生きています
—神は、もがき、悲しみ、苦しむ人ともにいる—

森 一弘 編著

定価 **1,260円** (税込)

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21-9
Tel. 03-3359-0451 Fax. 03-3351-9534 E-mail: suishin@sanpaolo.or.jp